



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 5

α L P H α L I G H T

さとう

Satou



アルファライト文庫



ミュア

銀猫族の少女。
一人前のメイドさんを
目指して修業中。

エルミナ

希少種族ハイエルフの
美少女。どう見えて
大のお酒好き。

ルナマリア

ミュディの姉にして、
リュドガの副官。
見た目は裏腹に
のうまん
脳筋。

ミュディ

優しく家庭的な
アシュートの幼馴染。
魔法適性は「爆破」。

ヒュンケル

リュドガの副官。
イケメンで面倒見が良く、
気苦労が絶えない。

シェリー

アシュートの妹。
「氷姫」の異名を持つ、
元・王国最強の
魔法師。

リュドガ

アシュートの兄。
「雷帝」として名を知られる、
大國ビッグバロックの
将軍。

アシュート

本作の主人公。
魔法適性が「植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーベルシュタインの
領主となる。

主な登場人物
CHARACTERS

第一章 春の訪れ

すっかり春の陽気ようきになった。

雪がわずかに残っているが、すぐに消えるだろう。庭にあったかまくらには魔法がかけられており、妹のシェリーに解除かいじしてもらおうとあつという間に崩くずれてしまった。

少し悲しいが仕方ない。これも春が到来した証あかしだ。

雪が溶けたことにより、農園や果樹園も再開する。

俺の魔法で土を耕たがし、ハイエルフや銀猫族ぎんねこが種や苗なえを植える。

以前手に入れたクリの苗木も植え、植木人のウッドにお願いして増やしてもらった。これでクリがいつでも食べられる。

あ、そうそう。暖あたたかくなつたから、ウッドや、ウッドの仲間であるベヨーテが外で遊べるようになった。そこで、ウッドたちと一緒に門番のファンババのもとへ行つた。

『ア、アシュト』

「やあファンババ。ようやく春になったな」

植物の巨人ファンババは、のんびりしたまま空を見上げていた。

だが、ウッドやベヨーテの姿を見ると、喜びをあらわにする。

「オオ！ フタリトモキタノカ！ オラ、ウレシイ！」

『ヒサシブリダナ……マタ、セワニナルゼ』

『フンババ、フンババ！ マタイツシヨ、マタイツシヨ！』

うーん、植物たちの会話だ。

ウッドはびよんぴよん跳ね、ベヨーテは近くの木に寄り掛かって帽子を傾けていた。

日差しは柔らかい。今日も一日晴れそう。

俺はのんびりと呟いた。

「春だなあ……」



村の外れに行ってみると、早くも教会の建設が始まっていた。

鍛冶場では、スライム製のステンドグラスが作られ、教会の鐘も立派なものが作られていた。

「おう村長！」

「こんにちは、アウグストさん」

ヘルメットをかぶり、図面を広げていたのはエルダードーフのアウグストさんだ。

他のエルダードーフやサラマンダー族に指示を出し、現場監督の立ち位置で仕事をしている。

アウグストさん……というか、エルダードーフとサラマンダーたちは上機嫌だった。

「久しぶりの大工仕事だ。しかも村長と奥さんの結婚式場となると、気合も入るってものだ。見てろよ、ワシらエルダードーフが最高の教会を建ててやらあ！」

「あ、ありがとうございます。期待しています」

教会に関しては問題なさそう。ここが完成したら、念願の結婚式だ。

結婚式で着るドレスのデザインについては、ミュディを中心に女性陣が毎日話し合っている。

俺が混ざろうとしたらシェリーに押しのけられた。まあ楽しみは取っておこう。ちなみに、俺のタキシードは白を基調とした一般的なもので落ち着いた。

「そーいやあ、さつき嬢ちゃんたちが様子を見に来たぜ」

「え、ミュディたちですか？」

「ああ。みんな仲良くな。しかも『これから毎日来ます。頑張ってください！』って言うてよ、差し入れまで持ってきたわい」

「そ、そうですか……」

ミューデイたち、気になってるのか……まあいいか。
さて、村の見回りを続ける。

住人たちは外で仕事を始めている。龍騎士たちに挨拶したり、すれ違うハイエルフや銀猫族にも声をかけたりした。モグラみたいなブラックモール族もちょこちょこ歩いて仕事をしている。

解体場に向かうと、魔犬族の男子三人とデーモンオーガの二家族がいた。

「あ、おにーたん！」

俺に最初に気が付いたのは、デーモンオーガの少女エイラちゃんだった。

手を振ると、魔犬族の男子三人は頭を下げ、デーモンオーガたちは友好的に迎えてくれる。

「お疲れ様です、村長」

「こんにちは。ベイクドさん、アルノーさん、ゲイツさん」

魔犬族の男子三人。リーダーのベイクドさん、アルノーさん、ゲイツさんだ。

最初は狩りをしてたけど、デーモンオーガ一家が来てからはもっぱら解体業に力を注いでいる。

ところで……この三人、彼女がいるんだよな。

「あ、あの？ 村長？」

「お、オレたちの顔になにか付いてます？」

「おい、なにかまずいことやったんじゃない？」

しまった。ついついじっくり見てしまった。俺は慌てて話題を振る。

「えーと、今日はみなさんお揃いでどこへ？」

よく見ると、デーモンオーガたちは完全装備だ。

聞くまでもない気がするけど、父親のバルギルドさんが答えてくれた。

「これから春の初狩りに出る。暖かくなると大物が起きだすからな、期待してしてくれ」
案の定、狩りでした。大物を期待しています！

ベイクドさんたちは、解体の準備というわけか。道具を準備してやる気満々だ。

すると、娘のノーマちゃんが俺の腕を抱きかかえる。エイラちゃんも反対側にじゃれついていた。

「ねーねー村長。大物狩ってくるからさ、春の宴会をよろうよ！」

「やろーよー！」

「え？ 春の宴会？」

「そーそー！ みんなで集まってさ、おいしい料理食べて、飲んで騒いで……んぎゃっ!?」

そこまで言った時、母親のアーモさんがノーマちゃんにゲンコツした。

「こらー！ 村長を困らせないの！」

「いったあゝ……」

「きやはは！」

エイラちゃんは楽しそうだ。それにしても春の宴会か……悪くないかも。

「申し訳ありません村長。ノーマの言うことは気にしないでください」

「ええゝ……いいじゃんいいじゃん！」

「ノーマー！」

「はゝい……」

そう言つて、デーモンオーガの両家は狩りに出かけた。

怒られたノーマちゃんを弟のシンハくんがからかい、ノーマちゃんは反撃し、ダイヤモンドの息子キリンジくんに止められ、エイラちゃんがケラケラ笑い、互いの両親が微笑ましげに見守る。なんとも平和な光景だ。

「うゝん……宴会、かあ」

文官のディアーナに相談してみるか。

というわけで、村の中樞……もとい、執務邸へ向かう。

「なるほど、春の宴会……新年会ですか。いい考えですね」

執務邸でディアーナに相談すると、意外にも好感触だった。

「冬^{ふゆ}の備蓄^{びよく}がまだ余っていますし、交易^{こうぎ}も再開します。ある程度消費しておく方がいいで

しょう」

「お、じゃあ」

「はい、いい機会です。住人たちも喜ぶと思いますよ」

「よし、じゃあ新年会を開催するか。準備もあるし、日程は……」

「こちらで調整します」

「わかった。じゃあ俺はシルメリアさんに伝えてくるよ」

「はい。お願いします」

というわけで、春の新年会を行うことになった。

第二章 にゃんことわんこの焼き物体験

新居に戻ると、銀猫族の少女ミユアちゃんと、魔犬族の少女ライラちゃんが、銀猫族のリーダーであるシルメリアさんに怒られていた。

ふむ……割れた花瓶^{かびん}、傍^{そば}に落ちているボール、垂れた二人のネコミミとイヌミミ……なるほど、ミユアちゃんとライラちゃんがボール遊びをしていたら、ボールが部屋に飛んできて飾^{かざ}つてあった花瓶を割ってしまったというところだろう。

「お帰りなさいませ、ご主人様。申し訳ありません、すぐに片付けますので」
 「ん、ああ、はい」

「ミユア、ライラ、これからは気を付けるように」

「にやう……」

「わうう……」

激おこのシルメリアさんは手早く花瓶を始末して部屋を出た。

俺は二人の頭にそっと手を乗せる。

「大丈夫？ 怪我はしてない？」

「にやあ……怒られちゃった」

「わふ……花瓶、割れたー」

「よしよし。ちゃんとシルメリアさんにごめんなさいはした？」

二人はぶるぶる首を横に振る。どうやら、シルメリアさんの雷が落ちた直後に俺が来たせいで、謝るタイミングを逃してしまったようだ。とりあえず頭をなでなで……

「ふにやあ……」

「くうん……」

よし、蕩けた。さっそく事情を聞くと、俺の推理は当たっていた。

「マンドレイクとアルラウネがウッドたちと日向ぼっこしてるから、わたしとライラで

ボール遊びしてたの」

「わうう。それで、ミユアの投げたボールが窓から入って、花瓶を倒しちゃったの」

「なるほど……そこをシルメリアさんに見つかって怒られたってことか」

「……………」

「ん？ ……違うの？」

あらら、またネコミミとイヌミミが萎れてしまった。別の理由があるらしい。

「二人とも、怒らないからちゃんとお話をしてごらん」

「にや……」

「わう……」

ミユアちゃんとライラちゃんは顔を見合わせ、俯いたまま話し始めた。

「あのね、花瓶を割っちゃったから……怒られると思って、かくそうとしたの」

「わう……お花を拾って、ぞうきんで床を拭いて、破片を拾ってたら、シルメリアに見つかって……いっぱい怒られたの」

「なるほど……」

つまり、証拠隠滅か。

懐かしい。子供の頃、俺もやったなあ……リユドガ兄さんの本を破いちゃって、自分の部屋に隠しておいて、あとでこっそり町の本屋で同じの探して戻そうとして……でも、

リユダガ兄さんには全てお見通しで、町の本屋で兄さんが俺を待ち伏せして……ちよつとだけ怒られて、そのあとで本を買ってくれたんだ。

「にやうう……シルメリア、怒ってた」

「んー……確かに、それは悪いことしちゃったね」

「くうん……ごめんなさい」

「うん。でも、それを言うのは俺にじゃない。シルメリアさんにきちんと謝ろうね」

「でも、ゆるしてくれにやいかも……にやあう」

「わううん……」

あらら、泣いちゃった……不謹慎だが、泣き顔も可愛い。

俺は花瓶の置いてあったサイドテーブルを見て……思いついた。

「そうだ！ いいこと考えた」



「……で、ここに来たってわけか」

「はい！ よろしく願います！」

「にやう！ よろしくー！」

「わん！ よろしくー！」

俺とミウアちゃんとライラちゃんがやってきたのは、エルダードワーフの鍛冶場。

鍛冶場で作るのは鉄製品だけじゃない。家具や置物や細かな日用品、デイミトリ商会やマーメイド族に卸す商品など、様々なものを作っている。

ほとんど足を運ばなかったから気付かなかったが、改めて見ると工房の建物がかなり大きくなっていた。各部門ごとに作業をしているようだ。

俺が挨拶したのは、この責任者であるラードバンさんだ。最初期にいたエルダードワーフ五人のうちの一人で、鍛冶関係はこの人にお任せである。

「ラードバンさん、この子たちと一緒に新しい花瓶を作りたいんです。どうかご指導、よろしく願います」

「おねがいしますー！」

ミウアちゃんとライラちゃんはペコッと頭を下げた。

そう、割れたなら作ればいい。替えの花瓶はあるだろうが、反省の意を込めて手作りで行う。

「ま、別に構わんぜ。こっちに來な」

案内されたのは、ハイエルフ数人が作業している焼き物関係の工房だ。

花瓶や茶わん、水差しみたいな陶器から、デイミトリ商会に卸す工芸品なんかも作って

いる。

「おい、指導してやってくれ」

「あれ、村長じゃん？」

「ミユアとライラも、珍しいね」

髪を乱雑にまとめ、手を泥まみれにしたハイエルフだ。確か名前は……

「ええと、ピンネとカトラだっけ？」

「お、正解！ さっすが村長、ほとんど喋ったことのないあたしらの名前を覚えてるなんてね！」

「嬉しいねえ、ふふ、さっすがエルミナの旦那さん！」

ハイエルフって、農園だけじゃなくていろんな場所で働いているんだよな。すると、ピンネが言う。

「はいはい、あたしは村長、カトラは子供を担当するね」

「おねがいします」

「はいよろしく。じゃあこっちね」

カトラは、子供を連れて『ろくろ』のもとへ。このろくろで陶器を作るそうだ。

俺はピンネの使っているろくろの傍に座り、さっそく花瓶作りを習う。

「まず、あたしがお手本を見せるね」

ピンネが練った粘土をろくろの上に置くと、どういう原理なのか、ろくろが回転する。

そしてピンネが器用に手を動かしたら、見る見るうちに丸くデコボコだった粘土が綺麗な筒状の形に変化していく。

たった数分で細い筒状の粘土が完成した。

「ま、初めてなら形に拘らず、『花瓶のような形』を目指して作るといいよ。じゃあ次は村長ね」

「え!? も、もうやるのか？」

「そりゃやらないと始まらないっしょ」

そういったわけで、レッツ花瓶作り。粘土をセットして、ろくろが回転……

「え、ええと……」

とりあえず、ピンネの真似をして粘土に手を添える……が、これが思ったより難しい。少しでも手の位置がずれると、粘土はぐにやぐにやになってしまふ。

「どれどれ、ちょっとお手伝い」

「え、ちよっ……」

「ほら村長、集中集中」

な、なんとということでしょう。ピンネが俺の背中に覆いかぶさっているではありませんか。そして、俺の両手を掴み、ろくろの回転に合わせて動かしていく……

「ほら、手を固定して流れるように……って、村長？」

「なな、なんだ？」

「……へえー」

俺は顔が火照っていた。

そりやそうさ。胸は当たっているし耳に吐息といきがかかるし……いやもう、マジで勘弁かんべんしてくれ。

「ふふ、村長ってかわいいねえ」

「勘弁して……」

結局、完成したのは個性的な花瓶だった。

それから結構な時間が経過し、カトラが声を上げた。

「こつちもできたよー」

「にやう！ かっこいいのできたー」

「わうう、わたしもー」

ミユアちゃんとライラちゃんも、それぞれ花瓶を完成させたようだ。

二人が作ったのは花瓶が一つと、形がそれぞれ違う陶器の、合計で三つ。

「ふふ、花瓶を二人で作って、あとはシルメリアさんへのお土産みやげなんだって」

「へえ、どれどれ」

ミユアちゃんが作ったのはコーヒークップ。歪いびつな形だがミユアちゃんの愛が詰くまっている。ライラちゃんが作ったのは湯飲み。こつちも少し傾かたいているが、ライラちゃんの感謝の気持ちを感じられる。

「あとは乾燥かんそうさせて焼くだけだよー」

「ああ、よろしく」

こうして、焼き物体験は終わった。

完成まで結構かかるらしい。まあ仕方ない。

おっと、シルメリアさんに新年会のこと伝えないと。割れ物騒動さうどうですっかり忘れていた。

「にやあ。たのしみ」

「わふ。ねんど、たのしいね」

ま、そんなに急がなくてもいいか。二人が元気になって何よりだ。

新居に戻ると、シルメリアさんが新しい花瓶よおを持っていた。

少しドキッとしたが、俺は平静を装よおって言う。ちなみにミユアちゃんとライラちゃんは使用人邸に帰ったのでこの場にはいない。

「あ、あーシルメリアさん、その花瓶は？」

「はい。ミユアとライラが割ってしまったので、代わりのものを」

「そ、そうですか」

せっかくだし、新しい花瓶ができるまで待つてほしい。
俺はなんとかごまかすことに決めた。

「え、ええと、また割れるといけないし、とりあえず花を飾るのはやめておきましょうか」
「? : ……は、はい」

「そ、それよりも、少し話があるんです。ちょつといいですか?」

「はい、かしこまりました。ご主人様」

シルメリアさんは一礼し、近くの柵に花瓶をしまった……ふう。

さて、本題だ。

「実は、新年会を行うことになったんです」

「新年会、ですか?」

「はい。春になったし、これから畑仕事や大工仕事も本格的に始まりますからね。また今年も頑張ろうって意味を込めて、みんなでパーツとやろうと思って」

「なるほど……だから宴会場の拡張が始まっていたのですね。さすがです、ご主人様」
「え」

宴会場の拡張? き、聞いてないけど。

まあ、住人も増えたし、宴会場はちよいと手狭だとは思っていたけどさ。エンジェル族の整体師や畑仕事に転移で来ているデヴィル族なんかも加えると、三百人以上はいるからな。

「ええと、そこで大変かもしれないんですけど、銀猫たちに豪華な料——」

「お任せください!! 腕によりをかけて作らせていただきます!!」

「うおっ!」

言い終える前に快諾してくれたよ……よっぽど料理好きなんだな。

「と、とはいえ細かい日程はまだ決まっています。あと、ハイエルフの里やワーウルフ族の村にも参加するか聞いてみるつもりですし……」

「わかりました。全銀猫に伝えます」

「は、はい」

一応、ハイエルフの里とワーウルフ族の村、世話になっている商人のデイミトリとアドナエル、それと魔界都市ベルゼブブの市長であるルシファーにも新年会のことは伝える予定だ。招待状の手配や料理の準備で、少し時間が必要かもしれない。

さて、一度ディアーナのところに戻るか。

第三章 新年会の準備

「やあ、アシユト」

ディアーナの執務邸に戻ると、優雅にカーフィーを飲む優男と、その後ろで彫像のように佇むデーモンオーガの男性がいた。

「る、ルシファー？　ダイドさんも……」

「やあ。暖かくなってきたし、仕事も一段落したんでね。妹の様子を見に来たついでに、君に挨拶しておこうと思って」

「そ、そうか……」

チラリとディアーナを見ると、「はあ」とため息を吐いた。ちなみに、ルシファーの妹とは彼女のことである。

ディアーナも聞かされていない、完全なサプライズ訪問だったようだ。その証拠に、文官娘のセレーネとヘカテーがガチガチに緊張してる。

「そうそう聞いたよ、新年会をやるって話!!」

「ああ、お前も参加するか？　はは、招待状を送る手間が省けたよ」

「もちろんさ。ぜひとも参加させてもらうよ」

「じゃあ、詳細が決まったら……ディアーナ経由で知らせるよ」

「ああ、期待してるよ、アシュト」

ディアーナを見ると、なぜかジト目で見られた。

「ふふ、アシュト、ベルゼブブに来るなら知らせてくれよ。本気のもてなしで歓迎するか

らさ」

「は、はは……わかったわかった」

ちよつと怖い。まさか、巨大な蠅が隊列を組んで出迎えたり……しないかな？

「あ、それと結婚式も呼んでくれよ!!　友人代表として祝辞を述べるからさ」

「あんな、そういうのは普通俺が頼むもんじゃないか？　それにお前とはそこまで深い付き合いじゃないぞ」

「つれないなあ……でも、招待はしてくれよ?」

「はいはい」

ルシファーは魔界都市の市長。対する俺は小さな村の村長。はたから見たら対等な立場とは言えないが、俺たちはそんなことに気にしなかった。

「さーて、せっかくだし何か手伝おうか？　ディアーナ、僕にも仕事をくれ」

「……部外者に任せる仕事はありません。お客様はどうぞお寛ぎを」

「はははははっ!!　やれやれ、一本取られたね」

ルシファーは、飲みかけのカーフィーを一気飲みした。



次に向かったのは悪魔商人デイミトリが経営する、『デイミトリの館・緑龍の村支店』だ。

中に入ると、ハイエルフのエルミナがお買い物を楽しんでいた。いろいろとあつて、エルミナは今や俺の奥さんである。

「あ、アシュトじゃん」

「よう。何買ったんだ？」

「ん、これ」

エルミナが出したのは、釣り具一式だった。

竿になんだか見慣れない道具が付いている。丸いものに糸が巻かれ、取っ手のようなものが付けられている……なんだこれ？

「釣り道具、だよな？」

「うん。春になったし、湖の魚たちも起きだす頃よ。海のお魚は美味しいけど、やっぱり私は湖や川の魚が好きかな」

「なるほど。自分で釣りに行くのか……で、それは？」

見慣れない道具を指差すと、カウンターにいた支店長のリザベルが答えてくれる。

「そちらは『リール』と呼ばれる道具です。取っ手を巻くと糸が巻かれる仕組みになっています」

「へえ……なんか面白そうだな」

「アシュトもやる？ 竿なら二本あるわよ」

「お、いいね。やるやる」

「うん。エサの調達もあるから、明日一緒に湖まで行こつ」

「ああ」

おつと、エルミナとリザベルに伝えておかないと。

「そうだ二人とも、近いうちに春の新年会を行うことになった」

「新年会ですか？」

リザベルが少しだけ首を傾げた。

「ああ。リザベル、よかったらデイミトリに伝えておいてくれ。招待状は改めて送るからさ」

「わかりました。会長は出席すると思いますが、伝えておきましょう」

「新年会!? なにそれ楽しそう!!!」

エルミナが興奮し始める。

「酒や料理もいっぱい出すし、宴会場は拡張までしてうれしいから、結構な規模になると思うぞ」

「わーお!!」

エルミナはウキウキな足取りで店を出ていった。

「新年会ですか……」

「ああ。お前も参加しろよ」

「はい。せっかくですので参加させていただきます」

さて、一度新居に戻るか。ミュディたちにも伝えないと。

新居に戻り、幼馴染の——いや、もう奥さんか——ミュディの部屋のドアをノックした。

「はい」

「俺だ。開けていいか？」

「どうぞ」

ドアを開け、ミュディの部屋の中へ……つて、何気に入るの初めてじゃね？

「あ、お兄ちゃん」

「ん？ シェリーもいたのか。ちょうどいい」

「どうしたの？ アシュト」

ミュディの部屋は、可愛らしいぬいぐるみや刺繍の施されたカーテンがあり、ベッドシートやソファまで、ミュディの趣味全開だった。

花が好きなミュディは、部屋をカラフルな花の柄で彩っていた。思わずきよろきよろしている、シェリーが言う。

「お兄ちゃん、女の子の部屋をジロジロ見るのはよろしくないよ」

「う、ごめん」

「あ、あは……」

恥ずかしいのか、ミュディは曖昧に笑った。と、とにかく。さっさと用事を済ませ……

「ん？ 二人とも、何か書いていたのか？」

「!?」

ミュディとシェリーの手に黒いインクが付いていたので、そう質問してみた。

ミュディはともかく、書類仕事が大の苦手な専属の文官を雇っていたシェリーが字を書くとは思えないんだけどなあ……

「べ、別に？ それよりアシュト、何か用事？」

「ああ。実は、春の新年会を開こうと思つてな。参加するだろ？」

「も、もちろん!! ねえミュディ」

「う、うん。わたし、いっぱいお菓子作るね!!」

「ああ、頼む。邪魔して悪かった、それじゃあな」

「う、うん」

「ば、ばいばい」

招待状はあとで出せばいい。この辺はディアーナに任せておこう。



よし、薬師としての仕事もあるし、一度薬院へ行くか。



「あ、あつぶなかつたあ〜……ナイス、ミュディ」
「う、うん。アシュトってば、鋭いよね」
「ええ……まったく、バレるところだったわ」
「うん。結婚式で着るドレスのデザイン、まだアシュトに見られたくないもん」
「そーね。どうせならサプライズで驚かせたいわ」
「そうだね。じゃあ、続きを考えようか！」
「うん！ じゃあまずミュディのこれ、もうちょっと胸元を開けた方がいいと思うのよ。
ミュディってば胸大きいし……」
「で、でも、恥ずかしいよ……」
「いいからいいから、はい決定！」



葉院に行くと、ワーウルフ族のフレキくんが葉草関係の本を読んでいた。

「あ、お疲れ様です、師匠！」

「フレキくん？ 今日のは休みのはずだけど」

「いえ、その、ここにある本が読みたくなって……申し訳ありません」

「ああいや、いいよ。ゆっくりしてくれ」

「ありがとうございます！」

フレキくん、本当に遅くなったよなあ。冬の間は実家に帰っていたけれど、一冬見ないだけでこんなにも立派になるとは……もう、俺の教えなんて必要ないんじゃないかな？

「あ、そうだフレキくん」

「はい、師匠」

「実はさ、冬も終わったし新年会を開こうと考えているんだ。そこで、ワーウルフ族の方々を招待しようと考えてるんだけど、どうかな？」

「え、えええっ!？」

「あ、さすがに全員は無理だけど……村長や代表の方数名とか、来られるかな？」

「は、はい!! きつと喜ぶと思います!!」

「そっか。近いうちに招待状を送ると思うから、その時はよろしくね」

「はいっ!! ありがとうございます!!」

フレキくんは立ち上がり、ガバツと頭を下げた。

ワーウルフ族の村人には久しく会ってないし、これを機に交流を深めよう。いつも美味しいコメをありがとうございますってね。

少し仕事をしたらまた村を回るかな。



宴会場の前を通りかかると、アウグストさんが図面を広げ、サラマンダーたちに指示を出していた。さっきまで教会を建てていたはずなのに、すごい行動力だ。

「また会いましたね、アウグストさん」

「おう、さつきぶりだな村長。聞いたぜ？ 新年会をやるってなあ!! がっはっは、この宴会場も狭くなつたし、美味しい酒のために立派なのを作るからよ、こっちも期待して待つてろや!!」

「は、はい。ありがとうございます」

相変わらず、酒が絡むとんでもなく元気になる。

丸太を運ぶサラマンダー族、デIMITリの館で買った工具で丸太を加工するエルダードワーフ。

そこら中で金槌やネイルガンの音が響いている。すごいな……職人たちの奏でるオーケストラだ。

「あ、そうだ。アウグストさん、いきなりで申し訳ないんですが、この宴会場に個室を作ることは可能ですか？」

「個室だあ？ 何に使うんだよ」

「いや、近いうちに大御所たちが宴会を開くと思うので、ひときわ立派で広い個室宴会場を建ててほしいんですけど……できますか？」

「いいぜ。村長がそんな願いをすんのは久しぶりだな。まあ任せとけ」

「ありがとうございます!!」

俺は頭を下げる。

大御所つてのはシエラ様こと緑龍ムルシエラゴ様をはじめとする、神話七龍の方々のことだ。ここにみなさんを集めて宴会するって言っていたし、でかい宴会場でやるより、立派な個室でやる方がいいと思う。

日が傾いてきたけど、もう少し村を回ろう。



「まんどれーいく」

「あるらうねー」

『ア、アシュト』

「マンドレイクとアルラウネ……あれ、ウッドとベヨーテは？」

フンババの頭の上で、葉草幼女のマンドレイクとアルラウネが日光浴をしていた。

おかしいな、でもウッドとベヨーテがいない。どこ行っただんだ？

『ウッド、ベヨーテ、センチイトアソन्दル。オラ、マザリタイ』

「あ、そうなのか。というかセンチイ、起きたんだな」

センチイは寒さが苦手で、冬になったら解体場の近くに深い穴を掘ってほとんどずっと寝ていた。

呼ぶと出てくるが、身体の動きが鈍かったので、冬は仕事を休みにしてのんびりさせた。関節が凍ってしまい、調子が出ないのだとか。

「まあ、あいつもずっと寝てたし、遊ぶのもいいだろ」

『オラ、イツシヨニアソビタイ、アソビタイ……』

「フンババ……よし、じゃあ俺と一緒に村の散歩でもするか？ ずっと門番じゃ大変だし、お前もリラックスしないと」

『イイノ？ ……モンバン、シゴト』

「少しくらいならいいさ。ほら、久しぶりに乗せてくれよ」

『……ウン!! オラ、アシユトサンボスル!!』

フンババは、マンドレイクとアルラウネが乗った頭の上に俺を乗せて、村の中をゆっくり歩きます。その足取りは、心なしか弾んでるように感じた。

そのまま村を散歩していると、後ろから久しぶりに聞く声が。

『おい、アシユトそんちよお』

「ん……おお、センチ、久しぶりだな」

『アシユト、アシユト!!』

『ヨウ、アシユト』

「おお、ウツドにベヨーテも」

センチに乗ったウツドとベヨーテだ。

大ムカデが村を這い回る光景は異様だが、センチも立派な村の仲間だ。最初は銀猫族やハイエルフたちは近付くのを恐れていたが、コミュニケーションが取れるようになってからは、気さくな性格だとわかり、怖がることはなくなった。

それに、センチの長い身体を使った滑り台は、村の人気アトラクションだ。

『いやあ、気持ちのいい季節になりましたなあ』

身体が長すぎるので半分以上を巻き、まるでカタツムリみたいな姿でフンババの隣を歩

くセンチ。

「ああ。もう春だしな。また働いてもらうぞ」

『お任せを!!』

カサカサと隣を歩くセンチは、キシキシと笑った。

すると、俺にもたれかかっていたマンドレイクとアルラウネが服を引っ張ってきた。

「まんどれーいく」

「あるらうねー」

「ん、よしよし。お前たち、あっちに行きたいのか?」

どうやら、センチの背中に移りたいらしい。

フンババが二人の葉草幼女を手に乗せ、センチの背中に移動させた。

『センチ、センチ、ダッシュ、ダッシュ!!』

「まんどれーいく」

「あるらうねー」

「へへ、カゼニナロウゼ!!』

『お、いいつすよ!! 久しぶりにワイのダッシュを見せてやりましょ!!』

「お、おいセンチ」

あんまり無茶はするな、と言う間もなくセンチはダッシュで消えた……は、速い。

まあ、これからまたいっぱい働いてもらうし、鈍った身体を動かすのはいいことだろう。それに、フンババと二人の散歩も気持ちいい。

「フンババ、ユグドラシルへ行こう。シロに会いに行くか」

『ワカッタ。オラ、シロニアイタイ』

フンババの頭の上はかなりフカフカで、春の陽気と合わさると眠くなってくる。横になるスペースはさすがにないが、このまま寝てしまいそうだ。

「アシュト村長、アシュト村長!!」

「ん……フンババ、ストップ。つて、ディアーナか」

「はあ、はあ……ようやく追いつきました」

ディアーナは肩で息をしていた。フンババの歩調はそんなに速くないが、歩幅が結構大きい。追いつくにはかなり走らないと駄目だろうな。

「招待状の送付リストを作成しましたので、チェックをお願いします」

「……用件はそれで終わり?」

「はい」

おいおい……それだけで俺を探してたのか。

今日は村を回って、いろんなところに顔を出している。俺を見つけるのも大変だっただろう。

よし、ちょっと狭いけど……

「フンババ、頼む」

『ワカッタ』

「え? ……さあ?」

フンババは首を傾げるディアーナをむんずと掴み、頭の上に。

肩が触れあう距離で隣に下ろされたディアーナは、一気に顔を赤くする。

「な、な……」

「散歩しながらでも書類は確認できるだろ? ほら、見せて」

「は、は……はい」

ディアーナに渡された書類には、招待状を送る人の名前が書いてあった。

ハイエルフの里からはジグベッグさんと数人。ワーウルフ族の村からは村長とラルフさん、ヴォルフさんの兄弟、そしてフレッキュんの家族たち。ベルゼブブ関係からはディミトリ、ルシファー（なぜか文字にためらいの跡があった）、村に働きに来ているデヴィル族。セラフィム族のアドナエルにイオフィエルさん、エンジェル族の整体師たち。お、マーメイド族もいる。海の町を案内してくれたギーナとシード、あとマーメイド族の長ロザミアさん。

他にも大勢いる……おいおい、マジで三百人以上の大宴会になるぞ。

「結構な数だな……」

「は、はい。その、アウグスト様に確認したところ、宴会場の改築はあと七日ほどで終わるそうです。準備期間も含め、開催日は十日後などでいかがでしょう……」

「そうだな。そうし……」

「あ……」

横を向くと、目と鼻の先にディアーナの顔があった。

オシャレメガネの奥に光る赤い瞳と目が合う。や、やばい……意識しなかったけど、この距離ってかなり危ない。

「そ、その」

「は、はい」

顔を背け、とりあえず謝ろうとした時だった。

『ツイタ、アシユト』

「え、あ」

『きゃんきゃんっ!! きゃんきゃんっ!!』

大樹ユグドラシルに到着し、フェンリルのシロが尻尾をブンブン振りながらフンババの周りをぐるぐる回っていた。

俺は急いでフンババから降り、シロをワシワシと撫でまくる。

「よしよし、ほらディアーナ、お前も撫でろよ!!」

『きゃううんっ!』

「は、はいっ!」

ふう……なんとかごまかせた……のか?



日も暮れ、フンババとの散歩を終えて新居へ。

家では、泥まみれのマンドレイクとアルラウネが、シルメリアさんにこっぴどく叱られていた。話を聞くとセンチとの散歩中に水溜まりに飛び込んだらしい。

「まんどれーいく……」

「あるらうね……」

「まったく……ほら、お風呂に行くわよ」

「あ、わたしも行くー!」

龍人の王族姉妹、ローレライとクララベルが二人を風呂へ連れていった。やれやれ、春の陽気に当てられたのかねえ。元気なのはいいことだけだ。

夕飯はシルメリアさんたち銀猫三人による特製海鮮丼を食べ、風呂に入って自室に戻る。

ウッドやベヨーテは、外で寝るようだ。もう寒くないし、また部屋は俺一人。ベッドに入り、欠伸をする。

「……明日も頑張ろう」

新年会の準備……まだまだやることがいっぱいだ。



新年会を開くと決めた数日後。

招待状も送り、開催まであと少しとなった。

宴会場の改築工事が終わり、銀猫たちが食材の仕込みや料理の打ち合わせで忙しい毎日を送っている。彼女たちは準備が楽しくて仕方ないのか、みんな笑顔だ。

酒蔵から酒樽を出したり、来客宿泊用の家の掃除をしたり、村は新年会に向けて動いている。

俺もそこそこ忙しく働いていた。中でも大いに悩んだのが、宴会での席順だ。宴会場は立食形式だが、来客の中での重役には席を用意したんだよな。

会場のレイアウト関係はパーティーの経験が豊富なローレライとシェリーに任せ、ミュディは調理組に参加した。

エルミナとクララベルは会場の飾りつけをして、ミュアちゃんとライラちゃんも手伝った。

改築した宴会場はかなり広くなっており、五百人規模のパーティーも容易く行える。

料理は会場の壁際に並べられ、ドリンクコーナーやステーキをその場で焼くコーナーを設けたり、ミュディが力を入れているスイーツコーナーも設営する。

メインは、デーモンオーガのみなさんが本気で狩ってきた全長三十メートルはある茶色いドラゴンで、『ライノセラスドラゴン』という国家レベルで危険な魔獣だ。

この新年会の発起人でもあるノーマちゃんが狩りで大張り切りしていたらしく、彼女のテンションにつられて盛り上がったデーモンオーガの二家族が獲ってきた。

ノーマちゃんは本当に喜んでた。

「ねえ村長、あたしがパーティーしたいって言ったからこんな……」

「いや、それもあるけど、春のお祝いをしたっていうのが本音だよ。ノーマちゃんは俺に気にかけてくれたんだ。本当にありがとう」

「村長……さいつこうだね！ 明日も美味しい肉いっぱい狩ってくるから！」

ってな感じで、ノーマちゃんは去っていった。

別れ際にアーモさんが申し訳なさそうに頭を下げたけど、ノーマちゃんがきっかけで新年会を開催しようと思ったんだ。謝るなんておかしい。